

地図について

数年前より、あらためて自分の暮らす世界、とりわけこの日本という国を自分の目で見て回りたい、周りから与えられた情報からこの国の有り様を描くのではなく、自分自身の手でこの国の姿を捉えてみたい、と強く思うようになりました。

人は、自分の直接体験だけでなく、テレビや新聞、インターネットといった様々な情報メディアを通して自分の生活する世界の全体像を把握しています。それらがなければ、政治、経済、事件、事故、海の向こうで、地球の裏側で、今このときに何が起こっているのかを短時間のうちに知る手だけではありません。情報メディアを通して見えてくる世界は、目まぐるしく変化していきます。変化はますます加速していくようにも思われます。

ひるがえって、私たちの生活のほとんどの時間は、そのような情報メディアに取り上げられることのない、むしろ平板な何気ない瞬間の連続です。テレビや新聞から感じられる時間の流れにくらべると、私たちのまわりに流れている時間の何と緩慢なことでしょうか。

情報メディアによってもたらされる情報は、刺激的で、強く記憶に残るものも数多くあります。しかしながら、それらもまた、そこに携わる人によって選択された現実の一部分です。とりわけマスメディアは、あえて刺激的な情報を、日本国内はもとより世界中から集めてきているのですから、そこから浮かび上がってくる世界像というものは、きわめて偏った戦略的な世界像とも言えるでしょう。

モノを、ある一方の側から眺めるだけでは、全ては把握できません。手にとり、匂いをかぎ、逆さまにして見る。そうやってはじめてモノの全体像が把握できるはずです。情報メディアから得た情報もまた、モノの一側面を照らし出すにすぎません。しかも、捏造、誇張、事実誤認、偏った情報の集中的流布など、これまで何度も繰り返されてきた過去を見れば、それがいかに曖昧なものであるかが分かります。

にもかかわらず、私たちは情報メディアからの情報があふれかえる環境に慣れ親しみ、ともすると、モノの価値判断すら与えられる情報に頼りきるようになっているのではな

いでしょうか。

カメラを使って目の前の出来事や景色をフィルムに収める行為は、人の五感に直結した情報収集の手段です。カメラを携え、日本各地を訪れ、自分の目の前で起こる出来事を見つめることは、知らず知らずのうちに、すでに私の頭の中に出来上がってしまっていた世界像を反芻し、自分なりにもう一度組み立て直すよい機会となりました。

大型カメラで日常の細部を捉えようとすると、いつもよりもずっと長く目の前の景色と向き合うことになります。民家の屋根のかたちや、曲がりくねった路地、空き地に生える草木。とりたてて刺激的ではありませんが、いつかどこかで見たこと聞いたこと、臭いや肌触りまで憶えている、こうした景色をあらためて見直すと、身のまわりにあふれかえる刺激的な情報ばかりに気をとられ、普段の何気ない瞬間にへの関心が、いつの間にか頭の片隅へと押しやられていたことに気がつきます。

私たちが生活する中で積み重ねてきた直接体験。私は、たとえそれが身のまわりにあふれかえる情報ほど刺激的ではないにせよ、自分の五感に直結した、現実感を伴いつつ自分の住む世界の全体像を把握するための、一番大切な手がかりであることに違ひはないと思います。

もちろん、誰もが皆、大型カメラを使って景色を捉えなければならないと言いたいわけではありません。

それはひとつの方針にすぎません。しかし、どのような方法であれ、私たちひとりひとりが積極的に、自分自身の直接体験を基本に、人それぞれに独自の視点から世界を捉えようとしなければ、もし仮に、私たちのことごとくが、ある限られたマスメディアをはじめとする、外側から与えられた偏った情報ばかりを頼りに自らの暮らす世界を把握しようとしてしまったならば、結果として、私たちの暮らすこの世界そのものが、本当に歪な世界になってしまふと思うのです。

2003年6月

圓井義典